12

フランスの少女向け媒体におけるBD

猪俣紀子

はじめに

フランスでは19世紀後半より児童向けの出版物が発達してきた。そのうちのひとつに定期刊行物の少女向け雑誌がある。この媒体は後にフレンチ・コミック（以下BDと表記[1]）を掲載し、長期間フランスの子どもたちに親しまれていく。本稿ではフランスの少女向け雑誌をとりあげ、少女向け雑誌におけるBDについて考察する。20世紀初頭より少女向けBD雑誌は出版され人気を博すが、70年代頃までには廃刊、または他の雑誌に統合され姿を消す。この過程は日本の、少女雑誌のなかで少女マンガの分量が急増し、少女マンガ雑誌として発展をとげた状況と対極をなしているといえる。フランスの少女向けBD雑誌とはどのような媒体であったのか。フランスの少女向けBD掲載雑誌3誌を取り上げ、年代別に内容構成、とくにBDの誌面占有率に注目しながら分析する。また、少女向けBD雑誌の特徴をメディア史の視点から日本の状況と比較しつつ考察する。

今回は閲覧、入手した限られた資料からではあるが[2]、これまであまり研究対象とされてこなかった少女向けBD雑誌をその構成内容から分析することで、少女向けBD研究、少女マンガ研究の今後、また、日本の少女マンガとの比較研究のきっかけを提示したい。

1 「BD」と表記した場合は「フランスの作品」を、「マンガ」と表記した場合は「日本の作品」を指すものとする。
2 著者が渡航した際にフランス国立図書館で閲覧したものや入手したものから作成した。今回扱うことができたのは10年間週刊で刊行されるなかの1冊を取り上げただけに過ぎず、このサンプル数で傾向を一概に述べることは難しい。資料のさらなる分析は今後の課題であるが、統計的な少女向けBD雑誌の内容分析は今まであまり取り上げられなかったテーマであり、本稿では現時点での資料を用いて分析していく。少女向けBDの参考文献としとしては*9e ART vol.6*, Les Cahiers du Musée de la Bande Dessinée, 2001などがある。

ISBN978-4-905187-00-4 http://imrc.jp/ ⓒ 2010 Kyoto Seika University International Manga Reaseach Center

1　少女向けBD掲載雑誌の誌面構成

本稿ではフランスにおける少女向けのBD掲載雑誌について論じていくが、簡略にBDの概観に触れておくと、日本ではマンガ作品はまず雑誌に掲載され、それが単行本にまとめられることが多いが、現在フランスではBD雑誌がほとんど存在しない。書き下ろしのかたちで、「アルバム」と呼ばれる単行本[3]が出されるのが一般的なBD出版のながれになっている。さらに、一般的にBDは男性向けの読み物という認識が強く、長らく女性はBDの読者として省みられることがなかった[4]。しかしBD掲載雑誌や女性向けの作品が歴史上、存在しなかったわけではなく、20世紀初頭から複数の少女向けのBD雑誌が出版され、少女たちに人気を博していた。

そもそもフランスにおける子供向けの定期購読誌の歴史は古く、最初に創刊されたのは1768年の「*Journal d'Education*[5]（教育の雑誌）」[6]といわれている。小型の月刊誌でまだ挿絵はなかった。その後徐々に本文に挿絵が用いられるようになっていく。1857年から1904年までが子どもの雑誌の開花期ととらえられており、大手出版社からも子ども向けの雑誌が出版されるようになる（私市2001：136）。BDがいつから子ども向けの雑誌に掲載されるようになったのか、その起源の定義は難しいが、吹き出しは使われていないものの、ひとつのストーリーを複数の絵で語ったのは1889年が最初であるといわれている（Filippini 1980：13）。1905年には、現在でも人気のあるBD、「*Bécassine*（ベカシーヌ）」を掲載した少女雑誌『*La Semaine de Suzette*（シュゼットの週間）』が創刊された。この雑誌は55年間続き、代表的な少女向けBD掲載雑誌といえる。この雑誌を皮切りに、いくつもの少女向け雑誌が刊行された[7]。このゴーティエ・ラングロー（Gautier-Languereau）から創刊され、ブルジョワ家庭の娘に読まれた『シュゼットの週間』（1905～60年[8]）と人気作「*L'espiègle Lili*（リリ）」が連載された比較的庶民向けの『*Fillette*（フィエット）』（1909～64年[9]）、すこし遅れて創刊された『*Lisette*（リゼット）』（1921～73年[10]）などがある。ここでは代表的な上記の3雑誌を分析する。

具体的には、それぞれを約10年ごとを目安に1冊ずつとりあげ[11]、内容をジャンルごとに分けて誌面占有率を算出し、とくにBDの割合がどう変化していったのか分析していく。この3誌をとりあげる理由は、連載BD作品の存在が確認できること、また他雑誌よりも長期間刊行されていて、戦前から戦後までの変遷を追うことが可能なためである。

初期の少女雑誌の内容は大体似たような構成になっている。『シュゼットの週間』が成功し、それを参考に後続の雑誌が誌面づくりを行ったためともいわれている。内容をおおまかに「BD」、「小説」、料理や裁縫などの「手芸」、読者同士の文通相手の募集や編集部から読者のお便りに応えるといった「通信」、生活の知恵や海外の記事などの「情報」、クロスワードやなぞなぞを含む「ゲーム」、自社の雑誌の定期購読の勧誘や、文房具などの他社が出す「広告」の7つのカテゴリーに分けて誌面における割合を集計した。

増田のぞみは少女向け雑誌の「娯楽化」について「視覚化」の側面に注目し、『少女倶楽部』におけるマンガの割合の変遷をグラフ化し分析している（増田2004：1-16）。それを参考にして、本稿では少女向け3雑誌における「BD」の割合と、ある時期まで中心的な内容であった挿絵入り「小説」の割合の変遷をそれぞれ図1～3で示した。

図によると、創刊当時はBDの掲載も割と見られた。戦時中に入ると3誌とも、

3　スタンダードなアルバムの版型は48ページのフルカラー、ハードカバー、やや大きめのA4サイズで、平均的な出版ペースは、年に1冊である。マンガとBDの流通による比較は「Inomata 2007」を参照。

4　グルンステンは著書のなかで、2003年における女性のBD読者は全体の20%しか占めていないと述べている（Groensteen 2005：52）。しかし2000年以降フランスで日本のマンガが普及するにつれてBDも女性読者を獲得したといわれることもあり、女性読者数の把握については今後の課題である。

5　仏語で「ジャーナル」という語は第一義的に「新聞」であるが、末松によると、19世紀半ばフランスで当時刊行されていた児童雑誌の表題で圧倒的に多いのが「ジュルナル（journal）」であり、そのほかは「ガゼット（gazette）」「ルヴュ（revue）」「プレス（presse）」「クーリエ（courrier）」などとなっている。ジュルナルが「一日の記録」「日ごとの刊行物」という本義を残しながら、やがて週ごと、月ごとなど一定の間隔で定期的に刊行される出版物、さらに定期刊行物の雑誌をも示すまでに意味が拡大してきた（末松 1997：64-67）ため、「雑誌」と訳されることが多い。

6　1762年のルソーによる『エミール』の出版により、「子ども」の新しい概念ができあがったためこのころに子ども向けの雑誌が創刊されたとしばしば言及される。この雑誌は文法、数学、科学、芸術、歴史、宗教などを扱っており、教育色が強く、子供というよりも青少年を対象としていた（石澤他 2009：54）。

7　本論で扱う3誌の他にたとえば、*Anette, Benjamine, Bernadette, Blondine, Capucine, Cendrillon, Mireille* などが挙げられる。

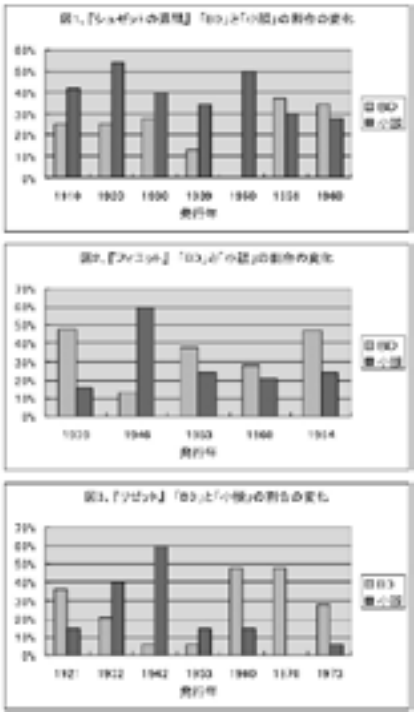
8　1940年6月6日27号から休刊。1946年5月30日に再開し、1960年8月25日144号が最終巻。

9　1942年3月8日1755号から休刊。1946年5月2日に再開する際、改めて1号から始め、1964年8月の42号が最終巻。

10　1942年3月15日の11号から休刊。1946年5月12日に再開し、1964年44号が最終巻。

11　実際に分析した号数を本文末尾の参考資料欄に記載している。10年ごとに集計し、可能な限り1月号を選んで集計している。

ISBN978-4-905187-00-4　http://imrc.jp/　ⓒ 2010 Kyoto Seika University International Manga Reaseach Center
ジャクリーヌ・ベルント編『世界のコミックスとコミックスの世界――グローバルなマンガ研究の可能性を開くために』
ISBN978-4-905187-00-4　http://imrc.jp/　ⓒ 2010 Kyoto Seika University International Manga Reaseach Center
ジャクリーヌ・ベルント編『世界のコミックスとコミックスの世界――グローバルなマンガ研究の可能性を開くために』



雑誌自体が休刊する。戦後まもなくは紙不足により全体のページ数が減少した雑誌もあり、BD がまったく掲載されていないか、掲載されていてもページ数が減少する傾向にあった。しかし戦後、年代が進むにつれページ数を取り戻し、小説と BD の割合が逆転し、それまで中心的な内容であった挿絵入りの小説が BD に取って代わられる現象が起きている。『シュゼットの週間』では 1959 年に BD が 40%弱を占め小説との割合が逆転する（図 1）。『フィエット』は 53 年の時点で BD と小説の割合が逆転し、その後少し減少が見られるものの、64 年には 5 割近くの割合を BD が占めている（図 2）。『リゼット』も 60 年に BD と小説の逆転が見られ、60 年にはほぼ半分が BD に割かれ、70 年もその割合は続いていた（図 3）。戦後、年代が進むにつれ、BD の割合が増加し、小説との割合が逆転しているのは 3 誌の共通するところである。日本でも 1958 年には『少女クラブ』の総ページ数の 5 割以上がマンガになっているが（増田 2004: 8）、フランスでも 1960 年前後のほぼ同時期に誌面における BD の割合が増加し、BD が半分近くを占める主要な内容になるという共通点がみられた。

そのほかの特徴として、50 年代後半あたりから、ひとつの写真を BD のひとコマのように使用し、それに吹き出しを書き込む、「ロマン・フォト（roman photo）」と呼ばれる写真小説がみられたり、掲載されているレシピや広告についても、以前は文字だけで表されていたものが、写真やイラスト、いくつかの連続するコマで描かれた BD の使用が行われ、年代が進むにつれ、誌面が全体的に「視覚化」している傾向が見られた。また、日本の少女マンガ雑誌では 60 年代後半に、グループサウンズやアイドル歌手の写真が多くなっていったが、フランスでも同じ頃アイドル歌手の写真が増えていったことも視覚化の共通点として挙げられよう。

少女向け BD 掲載雑誌における BD の割合を分析した結果、BD が 1960 年前後に雑誌の主要な内容となったこと、また雑誌全体の視覚化も進んでいたという日本の少女マンガ雑誌との共通点が判明した。しかしこのような共通点を持ちながらも、冒頭で述べたように、70 年代頃までにフランスの少女向け BD 雑誌は消失する。そのような状況に至った要因はなにか、さまざまな要素を複合的に比較検討する必要がある。本稿では、以下日本と異なるフランスの少女向け雑誌の特徴に注目し考察していく。

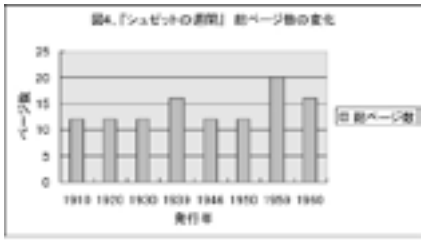
2　少女向け BD 掲載雑誌のページ数の推移

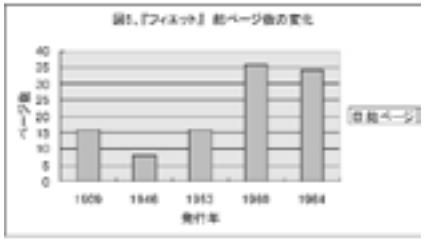
ここからはフランスの少女向け雑誌メディアの日本と異なる特徴、ページ数、版型、発行頻度に注目して考察していく。フランスの少女向け雑誌の構成内容を分析し、日本の場合との共通点を確認したが、フランスで出回っていた少女雑誌の形態は「パンフレット」のような薄さであり、日本の雑誌の形態とは大きく異なっていた。これにはフランスにおける雑誌の歴史的な背景が影響していると考えられる。

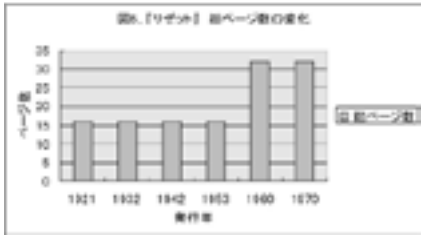
フランスにはもともと青本叢書（ビブリオテック・ブル）と呼ばれる出版物が 17 世紀始めから民衆に出回っていた。これはフランス北部のトロワで始まった、縦横ともに数センチの小さな本で、ページ数もわずか数ページ、現代の感覚からすると「本」というよりむしろ「冊子」と呼んだほうが適当な形態であった[12]。マンドルーは青本叢書の形態について「インクがしみ込んでしまう白いとはいいがたいザラ紙に印刷され、一本のひもでごく雑に綴じられ、青い紙で表紙がつけられているだけで、背もなければ表題も書かれていない。」と形容している（マンドルー 1988: 24）。しかし「こうした小冊子の刊行は非常な成功を博したので、トロワ自体でも他の都市でも、ほどなく模倣されるところとなり」（マンドルー 1988: 24）とあり、この青本叢書は人気を博し、広くフランスの主だった町でこの「小冊子」が流通していたことがうかがえる。先に触れた、

12　トロワの書籍商兼出版業者が行商人向けに始めたもので、1 スー、2 スーといった安い値段で売られた（マンドルー 1988: 24）。

ISBN978-4-905187-00-4　http://imrc.jp/　ⓒ 2010 Kyoto Seika University International Manga Reaseach Center
ジャクリーヌ・ベルント編『世界のコミックスとコミックスの世界――グローバルなマンガ研究の可能性を開くために』
ISBN978-4-905187-00-4　http://imrc.jp/　ⓒ 2010 Kyoto Seika University International Manga Reaseach Center
ジャクリーヌ・ベルント編『世界のコミックスとコミックスの世界――グローバルなマンガ研究の可能性を開くために』







フランスで最初の子供向け定期刊行物といわれた1768年刊行の『教育の雑誌』が、32ページの小型の版型で刊行されたことも、それ以前に流通していた青本叢書の版型にのっとったと考えると理解しやすい。その後1905年に創刊された『シュゼットの週間』などの少女雑誌も、12ページや16ページの折っただけで、ひもで綴じられていない形態の薄い「冊子」で出版されたが、これもそれまでの雑誌形態の伝統にのっとったものと推測できる[13]。この青本叢書の影響が感じられる冊子形態のフランスの少女雑誌に対して、日本で初めて出版された少女雑誌である、金港堂の『少女界』が1902（明治35年）の創刊号の時点で126ページ、1923年創刊の『少女倶楽部』が232ページあり、両誌とも縦23 cm×横15cmほどのA5の版型で、厚い「本」のような体裁であったことは注目すべき差異といえよう。

図4～6はフランスの少女向け3雑誌のページ数の推移を表にしたものである。十数ページから始まった雑誌が1960年前後には共通して雑誌全体のページ数が増加しており、2倍に増えているものもある。しかし創刊時のページ数が少ないため、2倍に増加しても32ページ程度にとどまっている。そのなかでBDに割り当てられるページ数には限界があり、60年代にBDの量が増加した時期でも、多くの場合、ひとつの作品につき1回6ページ程度の掲載にしかならなかった。コマ割については、1910～30年代は、1ページ3段×3列の

13　イギリスでも17世紀から小型の「パンフレット」に近い「チャップ・ブック」と呼ばれる本が出版されており、18世紀末から19世紀にかけては文庫本程度のサイズで、16ページが一般的な形態であった。19世紀になるとただ紙を折っただけのものや、綴じ糸もないパンフレット形式のものがかなり出版されている（小林 1988: 21）。

ISBN978-4-905187-00-4　http://imrc.jp/　ⓒ 2010 Kyoto Seika University International Manga Reaseach Center
ジャクリーヌ・ベルント編『世界のコミックスとコミックスの世界――グローバルなマンガ研究の可能性を開くために』

9コマのコマ割が多く、吹き出しはほぼ見られずコマ下部に数行の説明文があるタイプが多い。40年代あたりから吹き出しが用いられ始めるが、吹き出しと説明文が混在する場合も多く、混在したスタイルは60年代にも一部みられた。コマの形状については60年代も、基本的に定型の四角いコマが並べられるかたちであり、コマの大きさに変化をつけるときは、縦の長さはそのままで、横の長さを変えることで正方形か長方形を作る場合が多くなっている。

日本の場合、40年代まではマンガの割合は雑誌の総ページ数の1割ほどで、長方形のコマが規則正しく並べられた1、2ページのコママンガ中心であったが、50年代以降にマンガのページ数が大きく増える（増田 2004: 8）。55年以降にはストーリーマンガが増加するに従って作品が長編化し、1回の連載もより長く16ページや32ページになっていく（増田 2004: 9）。60年代に入るとクローズアップの使用や自由なコマ構成がみられるようになり[14]、これまでほぼ同一の形状のコマの連続だった誌面は、この時期以降、より変化の激しい構成となっていく。コママンガの表現からの変化が認められる。1950年後半から60年頃は少女マンガ的表現の最初の重要な時期だったといえよう。

それに対してフランスの場合は、限られたページ数のなかで作品が大幅に長編化することもなく、BD作家たちは新しい表現を発展させていくことが容易ではなかったのではないだろうか。フランスでは「少女向けBD」というジャンル自体が衰退していったが、少女向け雑誌のなかでBDが少女向けの特徴的な表現を試行し発展していく機会が持てなかったことが要因のひとつに考えられるのではないだろうか。

3　少女向け雑誌の版型の変化

次に版型についてであるが、日本では1951年に『少女ブック』、55年に『少女クラブ』が、A5版からB5版へ大判化し、同じく55年に『りぼん』『なかよし』がB5版の版型で創刊され、大判化しなかった雑誌や、読み物中心であった雑誌の多くは休刊にいたった。視覚的な娯楽を読者に提供することが雑誌の死活

14　増田は手塚治虫の『リボンの騎士』を1953年から連載された『少女クラブ』版と63年から連載された『なかよし』版とで比較し、10年後の作品である『なかよし』版に見られるストーリーマンガ的表現や、人物のクローズアップ、コマ構成の自由さの獲得を指摘している（増田 2002: 57-60）。

ISBN978-4-905187-00-4　http://imrc.jp/　ⓒ 2010 Kyoto Seika University International Manga Reaseach Center
ジャクリーヌ・ベルント編『世界のコミックスとコミックスの世界――グローバルなマンガ研究の可能性を開くために』

問題であったことがわかる。しかしフランスの少女雑誌の場合は、たとえば『シュゼットの週間』の創刊時のサイズが縦 32cm ×横 22cm だったものが、後に縦 27cm ×横 21cm に小型化し、また『フィエット』は縦 29.5cm ×横 19.5cm から始まるが、戦前に一度縦 39.5cm ×横 29.5cm に大判化する。しかし戦後に縦 26cm ×横 20cm と小型化した。『リゼット』は最初縦 26cm ×横 19.5cm であったものが、縦 28.5cm ×横 19.5cm へわずかながら拡大、しかし戦後は創刊当初の縦 26cm ×横 19.5cm サイズに戻った[15]。このように少女向け BD 雑誌は、大きさが変わってもほぼ A4 の版型の周辺で変化しており、逆に小型化する場合もある。日本のように時代が進むにつれ、版型が大きくなり、視覚化するという流れを有していない。

日本の少女雑誌の大判化について米沢嘉博は「少女雑誌から少女マンガ誌への転身」（米沢 1991a：15）であり、「これら少女雑誌は大判化をきっかけに、手塚以後のストーリーマンガを中心とした誌面に変わり、正しく、少女マンガ誌として道を歩み始める」（米沢 1991a：36）ことになると述べている。A5 から B5 への変化が、日本の少女雑誌のその後の方向性を決定づけたことになるが、それに対してフランスの少女向け雑誌は同時期に BD の比率は高まっていたにもかかわらず、雑誌が BD のために変化するということがなかったと推察される。

4　少女雑誌刊行のリズム

さらに、雑誌が刊行される頻度にも気をつける必要があるだろう。日本では『少女倶楽部』『少女界』などの雑誌は月刊誌として始まる。それがテレビの普及により月 1 冊というテンポは遅く感じられ、子どもたちの生活も週ごとのものに変化していく（米沢 1991b：4）。さらに多くの情報をより早く求める消費者のニーズに応えるように、月刊から週刊になっていくという経緯があった。それに対して、フランスのこれらの少女向け雑誌は最初から週刊で創刊されている。フランスではすでに 19 世紀から週刊雑誌が出版されており、その刊行頻度を踏襲したのではないかと考えられる。表 1 は、1801 年から 1987 年までの子供向け定期刊行物の発行頻度を表にしたものである（Fourment 1988）。1801 年から 1850 年の子供向け雑誌では 60%が月刊、約 20%が週刊である。また 1900 年までは月刊より週刊が多くなり、20 世紀前半の 1950 年までになると約 70%が週刊で月刊が 1 割程度しか占めていない。その後 1950 年以降になるとまた月刊誌が優勢になり、7 割弱を占めるようになる。それに対して日本で『週刊少年マガジン』などの週刊少年誌が創刊され話題となるのは 1959 年で、それは 50 年代半ばの一般誌の週刊誌創刊ブームの影響を受けての流れであり（呉 1997：148）、また週刊の少女向けマンガ雑誌が登場するのはさらにその後の 62 年である。

表 1　フランスの子供向け定期刊行物の年代別発行頻度

	月刊誌	週刊誌	その他	総雑誌数
1801-1850 年	60%	21%	19%	61
1851-1900 年	34%	44%	22%	41
1901-1950 年	9%	68%	23%	111
1951-1987 年	66%	15%	19%	151

雑誌が週刊の頻度になったのが、より多くの情報をより早く求める読者の要求にこたえるための、発展形としてであった日本と、最初から週刊というペースで始まったフランスとでは、その後の雑誌メディアとしてのあり方に違いが出てくるのは当然ではないだろうか。フランスの少女向け BD 雑誌は最初から週刊という、雑誌メディアとしては最も頻繁なペースで、薄い冊子の形態で出版され、その形態を崩すことなく最期を迎える。BD は数ページ程度以上の連載を求められることなく、新しい連載のリズム、ボリュームに即した新たな表現の模索も日本ほど必要とされなかった。

5　少女向け BD 雑誌消失

少女向け BD 雑誌は、他雑誌と統合をするなどして打開策を模索するも、60 年代から次々と廃刊していく。まず 1960 年に『シュゼットの週間』が、その後『フィエット』が 64 年に、『リゼット』が 73 年に廃刊する。『シュゼットの週間』の最終号には廃刊理由として、「最近の女の子は男の子と女の子の両方に向けられた雑誌のほうをより好んで読みたがる」[16] と書かれている。そして次週から定期購読者には代替雑誌として『ミッキーの雑誌（le Journal de

15　この 3 雑誌の版型の変化については「Bera 1998：583，547，566」を参考にした。

16　*La semaine de Suzette*，n 144，25 aout 1960，pp. 1-2.

ISBN978-4-905187-00-4　http://imrc.jp/　ⓒ 2010 Kyoto Seika University International Manga Reaseach Center
ジャクリーヌ・ベルント編『世界のコミックスとコミックスの世界――グローバルなマンガ研究の可能性を開くために』
ISBN978-4-905187-00-4　http://imrc.jp/　ⓒ 2010 Kyoto Seika University International Manga Reaseach Center
ジャクリーヌ・ベルント編『世界のコミックスとコミックスの世界――グローバルなマンガ研究の可能性を開くために』

Mickey)』が届くと告知され、この雑誌について「すべての年齢に向けたこの出版は多大な成功をもたらすと確信している」[17]と男女に向けられたことを利点としてアピールする広告文も載せられている。また「少女たちはテレビでアイドルを知り始め、もう『シュゼットの週間』の優しい道徳者の話に興味が持てなかった」(Filippini 1980: 113)、というものや、「現代の少女読者と生活に適応しないようになっていた。妖精の物語や屋根裏部屋の魔法はもうはやらない」(Fourment 1988: 371) という指摘もされている。少女向け雑誌が、すくなくとも後期には教育指導的な側面をもち、少女たちにとって刺激のない時代遅れな媒体となっていたことが推測される。『フィエット』はアイドル雑誌に変わり、『リゼット』は『ナード (Nade)』と統合するが最後には廃刊する (Fourment 1988: 371-372)。フールマンは、少女向けBD雑誌の消失は、母や姉の年齢を対象としたプレタポルテの服飾や化粧品を扱ったモードの雑誌を少女が読むようになったことも一因だと分析している (Fourment 1988: 339)。いずれにせよ、少女向けBD雑誌が、少女たちの心を掴む誌面づくりができていなかったため、雑誌の存在意義が薄れ廃刊にいたったと考えられる。

日本の少女マンガ市場では別冊が次々と創刊され、若い少女作家たちが続々とデビューして少女読者の読みたいものを提供していくユートピアとなる (米沢 2007: 323)。少女マンガが少女マンガとしてジャンルを確立していく時期に、BDは「冊子」の形態の少ないページ数を超えず、少女たちの要求を吸い上げながら発展していく過程を手に入れなかった。少女向けBD掲載雑誌が70年代には消失し、少女向けBDのジャンル自体が衰退するという事態の解明には、もちろん市場規模や同時期の少年向け媒体との比較[18]などほかの要素との複合的な考察が必要だが、日本と異なっていたBD雑誌の形態も要因のひとつに考えられるのではないか。

6 結論

今回フランスの少女向けBD掲載雑誌を取り上げ、BDに注目しながらその構成内容の時代による推移を分析した。分析結果から、年代が進むにつれて雑誌のなかでBDの割合が増加し、60年前後には小説と逆転して雑誌の主要な内容になっていったこと、BD以外でも誌面の視覚化が進んでいったことが判明した。そしてこれらの点に関しては、日本の少女向けの雑誌におけるマンガの増加状況と共通しており、時期もほぼ同時期であることがわかった。さらに、日本とフランスの少女雑誌、少女向けBD・マンガが大きく異なる過程をたどった理由を探るため、少女向けBD雑誌を版型、ページ数、発行頻度について日本の場合と比較しながら考察した。その結果、フランスの少女向け雑誌にはそれまでのフランスの雑誌メディアの歴史、たとえば17世紀の青本叢書の形態の影響がみてとれ、そのページ数、版型などの物理的な要因が、日本の少女雑誌、少女マンガと異なる発展をとげさせているのではないかと推測できた。フランスの少女向けBDの現状を解明するひとつの要因を提示できたのではないだろうか。

今後の課題としては、まずさらなる資料の分析は不可欠であるが、日本の「少女文化」の特殊性といったジェンダーの視点も忘れてはならないだろう。少女たちが少女雑誌という新興のメディアを足場としつつ少女文化を形成していった (本田 1991: 18) とされる日本と、少女たちがすぐに異性愛社会に入っていくフランスとのジェンダーの観点などからも分析できるのではないか。今後の少女向けBD研究、マンガ研究、それぞれの比較研究の際には、その国の風土、文化を考慮し、さまざまな要素から複合的に研究していくことが重要なのではないだろうか。

17 *La semaine de Suzette*, n 144, 25 aout 1960, pp. 1-2.

18 フランスの少年向けBD媒体は思春期向けに創刊された雑誌が、読者の成長とともに雑誌の内容も大人向けに変化していったり、読者によるアンケート投票を廃止したりという過程を経ていく (猪俣 2007: 6-13)。

参考文献

Bera, Michel et al. (1998): *Trésors de la bande dessinée BDM: Catalogue encyclopédique*, Paris: Glénet and Les Éditions de l'Amateur.

Filippini, Henri et al. (1980): *Histoire de la bande dessinée en France et en Belgique : Des origines à nos jours*, Paris: Ministère des affaires étrangères.

Fourment, Alain (1988): *Histoire de la presse des jeunes et des journaux d'enfants*: 1768-1988, Paris: Éole.

Groensteen, Thierry (2005): *La bande dessinée*, Toulouse: Éditions Milan.

Inomata, Noriko (2007): Le manga et sa diffusion en France: étude des raisons d'un succès, In: France-Japon: regards croisés Échanges littéraires et mutations

ISBN978-4-905187-00-4 http://imrc.jp/ © 2010 Kyoto Seika University International Manga Reaseach Center
ジャクリーヌ・ベルント編『世界のコミックスとコミックスの世界——グローバルなマンガ研究の可能性を開くために』

ISBN978-4-905187-00-4 http://imrc.jp/ © 2010 Kyoto Seika University International Manga Reaseach Center
ジャクリーヌ・ベルント編『世界のコミックスとコミックスの世界——グローバルなマンガ研究の可能性を開くために』

culturelles 7, Bern : Peter Lang, pp. 95-104.（猪俣紀子「マンガ、その流通と形態」『「交叉する文化」報告集』、大阪府立大学「地域学による地域活性化と高度人材養成」事業、2007年、317-328頁）
Mandrou, Robert et al.（1964）: *De la Culture populaire aux 17e et 18e siècles*, Paris: Imago［3e ed.］（ロベール・マンドルー、二宮宏之・長谷川輝夫訳『民衆本の世界―17・18世紀フランスの民衆文化』人文書院、1988年）
Piquard, Michel（2005）: *L'édition pour la jeunesse en France de 1945 à 1980*, Villeurbanne: Presses de l'enssib.
石澤小枝子・高岡厚子・竹田順子・中川亜沙美『フランスの子ども絵本史』大阪大学出版会、2009年
猪俣紀子「フランスにおける若者マンガ読者層とBD」『マンガ研究 vol.12』日本マンガ学会、2007年、6-13頁
小林章夫『チャップ・ブック　近代イギリスの大衆文化』駸々堂、1988年
呉智英『現代マンガの全体像』双葉文庫、1997年
私市保彦『フランスの子どもの本－「眠りの森の美女」から「星の王子さま」へ』白水社、2001年
末松氷海子『フランス児童文学への招待』西村書店、1997年
本田和子「戦時下の少女雑誌」、大塚英志『少女雑誌論』東京書籍、1991年、7-43頁
増田のぞみ「マンガ表現の時空（2）－少女マンガにおけるコマ構成」、関西大学社会学部『社会学部紀要』第3巻第2号、関西大学、2002年、53-141頁
増田のぞみ「少女向け雑誌における娯楽化傾向の推移」、社会学研究科院生協議会『人間科学』第60号、関西大学大学院、2004年、1-16頁
米沢嘉博『戦後少女マンガ史』ちくま文庫、2007年
米沢嘉博構成『子どもの昭和史　少女マンガの世界 1 昭和20年～37年（別冊太陽）』平凡社、1991a年
米沢嘉博構成『子どもの昭和史　少女マンガの世界 2 昭和38年～64年（別冊太陽）』平凡社、1991b年

参考資料

La Semaine de Suzette

1910年8月5日、1920年1月6日、1930年1月2日、1939年1月3日、1946年12月26日、1950年1月5日、1959年9月3日、1960年8月25日

Lisette

1921年7月17日、1932年12月25日、1942年1月11日、1953年8月16日、1960年1月30日、1970年1月4日

Fillette

1909年10月21日、1946年10月31日、1953年10月29日、1960年1月7日、1964年8月6日

ISBN978-4-905187-00-4　http://imrc.jp/
ⓒ 2010 Kyoto Seika University International Manga Reaseach Center